

考古学からみた筑後今村キリシタン

伊藤 慎二

I. はじめに

旧筑後久留米藩領の福岡県三井郡大刀洗町今（通称：今村）周辺は、江戸時代禁教期の潜伏キリシタン（かくれキリシタン）集住地区であったことで良く知られる（図1・2）。今村キリシタンは、九州の交通の要衝地である筑後平野中央部の開けた田園景観の中で、周囲の仏教・神道信仰社会と日常的に関わりながら、禁教期を通してキリシタンとしての宗教伝統を秘密裡に継承し続けた。他の潜伏キリシタン集住地区とのつながりは、長崎浦上の教会・信徒との接触・往来が幕末になって初めて行われたのみである。今村キリシタンは、多くの物理的に不利な制約のある環境的諸条件の中で、信仰という高度に文化的側面の独自性を孤立状態で長期間持続させた。強制的同調圧力の強い社会文化の中で、ヒトはどのように固有の地域文化・精神文化を形成維持できるのか。今村キリシタンの歴史的経緯は、人類史研究の上でも普遍的示唆に富む重要な事例といえる。しかし、幕末～明治時代初頭の久留米藩による今村キリシタンの一斉検挙拘束後、藩側のごくわずかな記録を除いて、禁教期の信仰細部に関するほとんどの同時代史資料を失ってしまった。禁教期の今村キリシタンの様相を探るためには、文字資料以外の物質文化に対して、考古学の観点から迫ることがこれまであまり試みられていない重要な課題と考えられる。そこで、小論では、久留米藩側による尋問に対してまとめられた口書帳類の記述と近世から近代の墓碑に着目して、考古学からの検証課題を試行的に整理する。

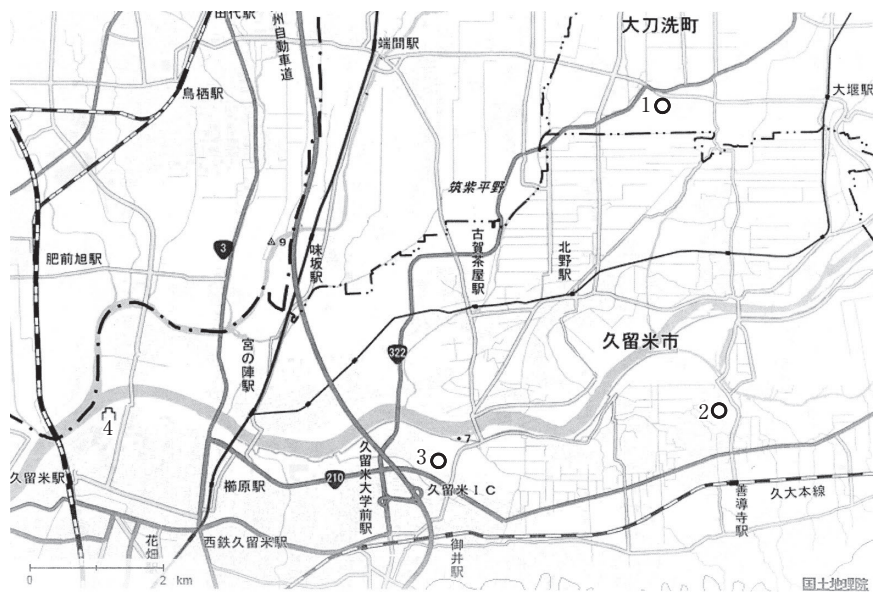


図1 今村周辺（1今村，2善導寺不断院，3安国寺，4久留米城）
※国土地理院電子地図一部改変



図2 今村カトリック教会堂（左）と今村地区中心部遠景（右）※筆者撮影

II. 今村キリシタンの概要

(1) 研究の状況

明治時代初頭の弾圧の際に、今村キリシタンは信仰に直接関わる多くの資料を失った。また、秘密裡の信仰という性格上、江戸時代を通して信仰の細部の世代間継承は口伝えが重要な役割を果たした。そのため、今村キリシタンの実態解明にあたっては、地域の伝承と、戦後発見された大刀洗町上高橋の老松神社旧所蔵の『邪宗門一件口書帳（御原郡今村）』（国武ほか1977）が重要でほぼ唯一の基礎史料である。

今村キリシタンに関する詳細は、今村カトリック教会が1952年に『今村切支丹小史』をまとめたことを皮切りにこれまで3冊の教会史を刊行し、その中で地域伝承などにも多くの頁数を割いて紹介している（今村カトリック教会編1952・1964、今村信徒発見125周年記念誌編集委員会編1992）。また、キリシタン史研究の枠組みにおいて、ヨハネス＝ラスレス氏と海老沢有道氏が、ヨーロッパ側の記録を踏まえて今村キリシタンの概要をまとめている（ラスレス1961、海老沢1978）。また、その特有の歴史的経緯が注目と関心を集め、小説の題材にも度々取り上げられている（三原1991、佐藤2002）。

今村キリシタンの研究に大きな転機をもたらしたのは、竹村覚氏・国武喆生氏が発見し、国武喆生・平田松雄・竹崎貞夫氏が1977年に翻刻した老松神社旧所蔵の『邪宗門一件口書帳』である（竹村1964、国武1973、国武ほか1977）。

『邪宗門一件口書帳』は、今村で托鉢を行った僧侶の告発を端緒に、1867（慶応3）年～1868（明治元）年に3度にわたり今村キリシタンの摘発検挙が行われ、その際の各信徒の詳細な尋問供述調書をまとめて高橋大庄屋後藤十郎左衛門が久留米藩公事方に提出した記録である。この発見により、禁教期の今村キリシタンの実態を探ることができる同時代史料がはじめて明らかになり、近年も新たな研究成果（安高・方2014）を生み出している。

これらとはやや異色な研究として、竹村覚氏の『キリシタン遺物の研究』（竹村1964）がある。竹村氏は、今村キリシタンの歴史的経緯を『邪宗門一件口書

帳』や『今村切支丹小史』などを基にたどるのみでなく、現地踏査により墓碑や建築などの関連文化財の存在や現存状況についても初めて報告した。

そこで、これらの研究を参考に、最初に今村キリシタンの概要を整理する。

(2) 信仰の起源

今村地区の古老の伝承では、島原の乱（1637・寛永14年～1638・寛永15年）後に落ち延びて今村に住み着いた右京・左京の兄弟が、今村キリシタンの起源と伝えていた（今村カトリック教会編1952）。この伝承に関連すると考えられる史料に、『久留米藩旧家由緒書』中の「嘉永四年高橋組旧家の書類書上」があり、天正年間（1573～1593年）の御原郡田中村（田中吉政筑後入国に伴う1601年の村名変更以前の今村旧名）に平田右京・左京・勘解由の3人兄弟の名が記載されている（平城ほか1981, 今村信徒発見125周年記念誌編集委員会編1992）。また、『邪宗門一件口書帳』の記述によると、「御原郡今村の儀、切支丹宗門源三郎・弥右衛門并御井郡府中町与左衛門寛永八年未年島原一揆より七年以前転類族に相成、其末葉にて是迄密々其宗旨の端末を相営み」（国武ほか1977：122-123頁）としている。今村キリシタンは、1631（寛永8）年に潜伏キリシタンになった源三郎・弥右衛門・与左衛門以来秘かに信仰を継承していた子孫だという。また、上記の人物との関係も含めて口書帳でも詳細を不明とする今村キリシタンの伝承上の創始者で、「ゼゾラスマリヤ様」と唱える崇敬対象であった、御原郡本郷町の獄門場で殉教死したとされる「ゼーアン」という人物の塚も存在した（国武ほか1977：126・131頁等¹⁾（図3）。つまり、今村におけるキリスト教受容は、江戸時代初期の1631（寛永8）年以前であることは確実であるが、それ以前のどの時期にまで遡るのかは明確でない。

歴史的に見て、今村を含む筑後平野一帯にキリスト教の影響が最初に及ぶのは、この地域が豊後の戦国大名である大友義鎮（宗麟）の支配下にあった戦国時代後半である。戦国時代には、今村の北隣の上下高橋村を拠点に高橋氏が周辺に勢力を広げていた。そして、大友一族の一万田左馬助²⁾が、高橋長種の没後の1552（天文21）年に高橋氏の家名を継ぎ、高橋三河守鑑種と改名した。大

友氏の拠点である豊後府内などでは、その前年の1551（天文20）年にフランシスコ＝ザビエルがキリスト教の布教を開始しており、その影響が直接・間接的に今村にまで及んだ可能性は十分に考慮される。その後永禄年間（1558～1570年）にも、ルイス＝アルメイダらが付近に数回滞在した記録もあることから、この頃までには今村に最初のキリシタンが出現していたと考えられる（平城ほか1981，今村信徒発見125周年記念誌編集委員会編1992）。



図3 信徒発見当時の今村復元想像図
 出典：（今村信徒発見記念誌編集委員会編1992）再トレース

豊臣政権の九州攻略に伴い、1587（天正15）年に毛利（小早川）秀包が久留米（篠山）城を築城した。毛利秀包は、豊後の大友宗麟の娘（洗礼名：マセンチャ）を妻とした関係からキリシタン大名となり、久留米城下に天主堂を建立した。1600（慶長5）年の関ヶ原戦後に毛利秀包は改易となり、新たに筑後を領国とした田中吉政が本城の柳河（柳川）城に対して久留米城を支城とし、吉政の子の田中吉信が入城した。田中吉政の没後は久留米を含む筑後の領国を吉政の子の田中忠政が継承したが、忠政死去により1620（元和6）年に無嗣断絶改易となった。この田中氏支配下までの久留米一帯は、同時代の他領と異なり、キリシタンに比較的寛容であったともされる。その後、柳河城は立花氏、久留米城には幕末まで続く有馬氏が入り、有馬氏の久留米藩政下で本格的な禁教時代が到来した（ラウレス1961，平城ほか1981）。

以上の経緯を総合すると、1552（天文21）年以降に形成されたキリスト教に

接する素地から最初のキリシタンが現れ、近世初期に潜伏キリシタンとして意識的に強固に信仰を継続する人物が加わることで中核的集団が形成され、殉教者崇敬を象徴的に共有する「今村キリシタン」に再編成された状況が想定できる。

(3) 発見と復活

日本でのキリスト教再布教のために、プチジャン神父をはじめとした最初の宣教師が1863（文久3）年に長崎に到着し、1865（元治2）年に大浦に天主堂が建設され、同年に浦上の信徒も発見された。そして、藍の仕入れのために久留米藩領内を訪れた浦上の信徒が得た情報をもとに、ローケイニユ神父の勧めで信徒の深堀徳三郎・相川忠右衛門・原田作太郎が1867（慶応3）年に今村を訪ねてキリシタンの発見に成功した。今村からも平田弥吉・平田信右衛門が最初に長崎の教会と信徒のもとへ直接訪れ、相互の往来が開始された。その後、今村の青木才八家の土蔵の二階で平田弥吉が中心となり伝道が開始されたが、その頃今村を訪れ村民の不審な対応を受けた托鉢僧が本郷町の役所に告発し、1867（慶応3）年～1868（明治元）年にかけて3回にわたりキリシタンの検挙拘束が行われ、あわせて信仰に関わる器物もすべて押収された（今村信徒発見125周年記念誌編集委員会編1992）。

発見した信徒数は、高橋大庄屋の後藤十郎左衛門が1868（明治元）年11月に久留米藩の公事方に提出した「申上覚」によれば、今村500人・上高橋村157人・小島村60人・平田村9人・両本郷町108人・高樋村4人・本郷枝村9人・菅野村4人・徳次村9人・友光村8人の合計868人となっており、このうち今村・上高橋村・小島村が中心となり、養子縁組や婚姻などを通してその他の村に信仰が伝わった経緯が記されている（国武ほか1977：142頁）。

大庄屋の仲介で、信徒たちは形式的に改宗を誓約したことでやがて釈放されたが、1873（明治6）年の禁教令撤廃後も公然と信仰を行うことは難しい時期が続いた。たとえば、1879（明治12）年頃に死去したハヤという婦人の葬儀を、禁教期の今村の慣例と異なり、仏僧の介在なしに平田弥吉・与吉が実施したと

ころ、仏僧の告発により両名は三池炭鉱で3年間労役に処せられた（今村信徒発見125周年記念誌編集委員会編1992：86頁）。

しかし、1879（明治12）年にジャン＝マリー＝コール神父が今村を訪れ、1880（明治13）年にはソーレ神父が今村に定住して、1881（明治14）年には最初の教会が木造で建設された。そして、本田保神父の先導と鉄川与助の設計施工により、1913（大正2）年に赤レンガを用いたロマネスク風の現在の今村カトリック教会堂が完成した（図2）。また、1976（昭和51）年に、教会堂敷地内に納骨堂が設けられた（今村信徒発見125周年記念誌編集委員会編1992、大刀洗町教育委員会編2012）。

Ⅲ. 考古資料としての今村キリシタン関連文化財

(1) 『邪宗門一件口書帳』の考古学

a. 遺物

1867（慶応3）年～1868（明治元）年にかけて3回にわたり今村キリシタンの検挙拘束が行われた際に、信仰に関わる器物もすべて押収された。それらの品目・数量については、『邪宗門一件口書帳』（国武ほか1977）の中に列記されており、禁教期の信仰に関わる失われた物質文化の概略を知ることができる。

それらの押収品目名・数量と、所有者と入手経路を整理したものが、表1である。その結果明らかなこととしては、メダイと考えられる「丸金仏」やキリスト十字架磔刑像と考えられる「十字金仏」、聖像画など、そのほとんどが幕末の浦上信徒との接触往來を機会に今村信徒側が入手したものだということである。コンタツである「珠数」についても、自作品や不明品を除くと長崎・浦上から入手したものばかりある。そこで、浦上信徒との接触往來以前・禁教期以前からの伝来品に注意すると、わずかに3点のみその可能性がある。詳細が不明確であるが、「新作」所有の「丸金仏」1点のみが「以前より」と付記されており、浦上往來以前・禁教期以前から今村に伝来した可能性がある³⁾。その他に、禁教期以前に遡る可能性がある資料としては、「安右衛門」家がかつ

表1 今村キリシタン信仰関連公事方押収品一覽

(1) 辰九月朔日「高橋大庄屋後藤十郎左衛門」より「御公事方様」に「取揚差上」品

所有者名	品名・数量	入手経路
弥吉(今村)	丸金仏1, 十字金仏1, 珠数1	浦上? → 弥吉
新作(今村)	以前よりの金仏丸1	伝世品?
善市(善一)(今村)	丸金仏1	浦上 → 弥吉 → 善市
善四郎(今村)	十字金仏1	浦上 → 善四郎
喜助(今村)	丸金仏1	浦上 → 弥吉 → 喜助
庄八(今村)	丸金仏1	浦上 → 弥吉 → 庄八
善五郎(今村)	丸金仏1, ケレント写本1	浦上 → 弥吉・善市 → 善五郎
卯次郎(今村)	丸金仏1	浦上 → 弥吉 → 卯次郎
藤平(今村)	十字金仏1	浦上 → 弥吉 → 藤平
伊吉(今村)	十字金仏1	浦上? → 伊吉
政右衛門(今村)	十字金仏1	浦上 → 政右衛門
才八(齋八)(今村)	丸金仏1, 珠数1	浦上 → 弥吉・庄八 → 齋八
里津(小島村 市平母)	十字金仏1, 珠数1	浦上 → 里津

(2) 辰十一月十九日「高橋大庄屋後藤十郎左衛門」より「御公事方様」に「申上覚」記載品

所有者名	品名・数量	入手経路
安右衛門(今村)	古来より持伝候器物1(土中埋置)	以前畑中より掘出 → 伝世品
用三郎(今村)	鈴様の物1	伝世品
新作(今村)	珠数1	自作?
恵吉	珠数1	不明
忠吉	珠数1	不明
嘉七	珠数1	不明
又右衛門	珠数1	不明
十右衛門	珠数1	不明
平八	珠数1	不明
幾右衛門	珠数1(土中埋置)	不明
和三郎	珠数1(土中埋置)	不明
十吉	珠数1(土中埋置)	不明
善吉	珠数1(土中埋置)	不明
恵助	珠数1(土中埋置)	不明
源七	珠数1(土中埋置)	不明
忠吉	文言10	弥吉 → 忠吉

(3) 辰十一月「高橋大庄屋後藤十郎左衛門」より「御公事方様」に「申上覚」記載品

所有者名	品名・数量	入手経路
新作(今村)	天主文(延享5年)1	伝世品(屋根葺き替え時に藤蔵が発見)
弥吉(今村)	絵像1	浦上 → 弥吉
利平次(今村)	珠数1	弥吉 → 利平次
次平・次郎右衛門(上高橋)	珠数2	自作

(4) 各「御吟味に付申上覚」の品目 ※上記(1)~(3)と重複関係不明の品名一覽

所有者名	品名・数量	入手経路
弥吉(今村)	ケレント1, 十戒1, サグラメンドウ1, 絵像1	浦上 → 弥吉
新作(今村)	金仏1, 珠数1, 天主文写本5	浦上 → 利一・新作(金仏), 弥吉 → 利一・新作(珠数1・写本1), 自作(写本4)
善市(善一)(今村)	珠数1	弥吉 → 善市
喜助(今村)	珠数1	弥吉 → 喜助
庄八(今村)	珠数1	弥吉 → 庄八
善五郎(今村)	珠数1	弥吉 → 善五郎
藤平(今村)	珠数1	弥吉 → 藤平
才八(齋八)(今村)	金仏1	浦上 → 弥吉・庄八 → 齋八

て畑中より掘り出して以来所有する銀製の器物で、今村で浦上信徒が実見して「コッポン」であるとした下記の記述がある。なお、押収直前に土中に秘匿埋納した際に、付属のネジが2本紛失したとされる（国武ほか1977：142頁）。

「安右衛門宅え古来より相伝居候銀にて拵候器物の義、右浦上村の者と新作宅にて一見仕候処、コッポンと申品にて有之候段浦上人より申聞候」※辰十一月・弥吉の口書帳（国武ほか1977：126頁）

「安右衛門儀、銀にて造り候器物壱つ、已前より所持仕、是は以前畑中より掘出候由にて、持伝居候得共、いづれの頃よりと申儀承知不仕候」※辰十一月・安右衛門・用三郎の申上覚（国武ほか1977：135頁）

そのほかに、「用三郎」も以前から鈴状の物を1点所有しており、キリシタン関係品としての自他の認識から、「安右衛門」の銀製の器物ともども、下記のように公事方の押収に応じている。

「用三郎儀、以前より鈴様の物壱つ所持仕居候、然に此節御委細御申諭御吟味御座候に付ては全改心仕、已来邪宗門に決て相携不申、転宗仕候に付ては、右所持仕候品々差上申候」※辰十一月・安右衛門・用三郎の申上覚（国武ほか1977：135頁）

以上の3点の伝来品に関する記述を、最近のキリシタン考古学の研究成果と照合する。メダイと考えられる「丸金仏」については、後藤晃一氏による日本国内のキリシタン遺物としてのメダイに関する研究がある。後藤氏の研究によれば、16世紀末～17世紀初頭を境に、日本国内生産の鉛・錫製・銅製主体のものから、おもに西ヨーロッパで生産された真鍮製のものに変化する可能性が高いことなどが指摘される（後藤2011）。幕末の浦上との交流以前に今村キリシタンが保持していたメダイが特定できれば、その形態や聖像図画表現細部の型式学的検討とあわせて、今村キリシタンの初期の信仰伝来経路などの解明につながる可能性がある。

一方、ネジが付属する銀製の器物については、素直にキリシタン関連遺物と考えた場合は、実際の遺跡出土例はまだ存在しないが、今野春樹氏の研究を参照すると、カリス（聖杯）類（今野2013）の可能性はある。しかし、浦上信徒

などの長崎のキリシタンからの旧長崎奉行所押収品が中心の東京国立博物館所蔵キリシタン関連遺品（小林編2001）にも、同様の器物は見られない。鈴状の物については、形態細部の特徴も明らかでないため、簡潔な記述のみでは日本国内の各時代にある類似品と区別することは困難である。ただし、ネジが付属する銀製の器物と鈴状のものが、ともに「安右衛門家」所有地内の「ゼーアン」の塚周囲の畑土中から回収されたものであれば、別の可能性も考慮できる。「ゼーアン」の塚が古墳時代の古墳を再利用したものであったとすれば、たとえば再利用あるいは周囲の開墾によって破壊された古墳から出土した古墳時代の馬具類などに、殉教者伝承の観点から誤解して新たな意味づけを江戸時代の今村村民が与えた可能性も考えられる。

いずれにしても注目されるのは、浦上信徒接触以前・禁教期以前から伝来した可能性のある今村キリシタンの信仰関連品が、『邪宗門一件口書帳』の記述では極端に少量ということである。たとえば、今村キリシタンと同様の孤立状態の潜伏キリシタン集住地区であった代表例に、大阪府茨木市千提寺・下音羽地区がある。千提寺・下音羽地区は、著名なフランシスコ＝ザビエル肖像画をはじめ、禁教期以前に遡る多くの多様な信仰関連品を保持していた（新村1923、井藤編1999）。このような状況を踏まえると、今村キリシタンが伝来の信仰関連品に乏しい理由として、①禁教期初期に完全秘匿実施、②信仰関連品の入手困難な禁教期に信仰本格化、③公事方の搜索押収を免れた⁴⁾、といった3つほどの可能性が考えられる。

また、以上とは別に、現在東京国立博物館が所蔵する旧長崎奉行所が長崎の信徒から押収したキリシタン関連遺品（小林編2001）と比較すると、長崎ではいわゆる「マリア観音像」と呼ばれる中国明清期製などの白磁観音像が非常に多いのに対して、今村キリシタンの押収品目にはこのような代替的な偶像類が含まれていない。これは、後述する禁教期の今村キリシタンの墓碑を考慮すると興味深い。

b. 遺構・遺跡

今村キリシタンにとって信仰上の最重要聖地は、安右衛門所有地内の殉教者

「ゼーアン」の塚であった。現在の今村カトリック教会堂の祭壇部分の直下に位置していたとされる（今村信徒発見125周年記念誌編集委員会編1992）。『邪宗門一件口書帳』では、以下のように説明する。

「村方安右衛門持抱の藪中え古来よりゼーアンと申墓跡の物御座候。是は今村切支丹張本の塚とも申伝有之候得共、委敷は存不申、只々村方の者尊敬仕居申候。然処、去卯九月廿二日三日頃、浦上村得三郎、同人兄虎次郎并吉太郎・忠右衛門・儀右衛門都而五人今村へ参、是は長崎にて御詮議稠敷故密々逃散候由に御座候。其節右ゼーアンの脇に有之候古井戸えは宗旨の品物杯取埋可有之と衆議の上、右徳三郎共立会、私共サガラメントウ受居候村方庄八・政右衛門・善五郎・藤平・卯次郎・伊吉・喜助・善四郎・次吉、外に安右衛門・用三郎共、堀見候得共、何品も無御座、古井戸ヶ輪桶也式つ出候而已に御座候」※辰十一月・弥吉の口書帳（国武ほか1977：126頁）

今村キリシタンの創始者と伝えられていた殉教者「ゼーアン」の墓は、塚のような形状をしていたとする。そして、その墓の脇の古井戸には、信仰上の伝来品が埋納されていることが見込まれ、今村滞在中の浦上信徒も立ち会って1867（慶応3）年9月に探索を行ったが、結局古い井戸桶2点以外には、なにも見つからなかったという。これらの背景事情について、『今村切支丹小史』では、「ゼーアン」を「ジョアン又右衛門」としたうえで、次のように詳しく説明する。

「いま聖堂の建っている敷地は西小路と称して以前は竹藪があった。その中にジョアンの墓があって毎月の二十日は‘当り日’として遠くから履物を脱いで、うやうやしく、其墓に詣でて祈りを捧げていた。「竹藪の中であったが、その墓の上には草一本生えなかったという」。さらに、ジョアン又右衛門の遺言により、「信徒に命じて宗教上の用具を残らず隠させた。信徒は其の命令のままに、一部は竹の筒に入れ、屋根裏に隠し、一部は書籍から祭具に至るまで残らず石櫃に入れて之を空井戸に隠して上から土を被せた」（今村カトリック教会編1952：2頁）。

なお、「ゼーアン」の塚は、安右衛門と用三郎の辰十一月（1868年・明治元

年)の「御吟味に付申上覚」によると、公事方の命令で「御取開」が行われる(国武ほか1977:136頁)。『邪宗門一件口書帳』には、その結果について詳しい記述がないが、『今村切支丹小史』では、以下のように述べる。

「古老の話に由ると明治の初めの迫害の頃、大庄屋が、隣村の異教者を伴れて来て、その墓を発掘したが、指先位の白いものが出たが、それは又そのまま埋めてしまって、信者が、此処に来ない様にと大便をまいたということである」(今村カトリック教会編1952:2頁)。

以上のように、幕末～明治時代初頭に、「ゼーアン」の塚とその脇の古井戸内の探索が行われたが、この時点では信仰に直接関連する遺構・遺物はなにも発見できていない。

もし仮に今村周辺に禁教期以前の信仰関連施設が存在した場合、近隣の発掘調査例が参考になる。たとえば久留米市両替町遺跡では、小早川(毛利)秀包が1600(慶長5)年に久留米城下に建立した天主堂に関連すると推測されている建物跡柱穴列と十字架状の小文様をもつ軒平瓦1点が確認されている(大石編1996)。また、朝倉市秋月城内では、カルワリオ(ゴルゴダの丘)上にそびえる罪標十字架というより明確なキリスト教式図像を備えた軒丸瓦が1点出土しており(甘木歴史資料館編1988,西谷2010,井澤2010)、関連施設の存在がうかがわれる。さらには、キリシタンとしての埋葬の場合、寝棺伸展葬への強いこだわりが国内各地の発掘調査検出例から指摘されている(今野2013)。墓碑形態も、禁教期以前の肥前島原半島周辺と豊後では、寝棺伸展葬に対応した伏碑形墓碑が主体であったことも知られる(大石編2012)。禁教期以前の今村周辺に、これらに類する遺構が形成された可能性も充分考慮に値する。

さらに注意されるのは、信仰継続の危機に際しての今村キリシタンの信仰関連品の秘匿行動である。『今村切支丹小史』が述べる「ジョアン又右衛門」の遺言が事実であれば、竹の筒や屋根裏など、大阪府茨木市千提寺・下音羽地区の潜伏キリシタンと同じ秘匿方法を採用していたことになる。また、『邪宗門一件口書帳』では、公事方による検挙危機に直面して、多くの信徒がメダイやコンタツ等の信仰関連品を土中に秘匿埋納したことを証言している。これは、

たとえば福岡県内のキリシタン遺物出土遺跡である福岡市博多遺跡群第111次調査地点と、北九州市黒崎城跡遺跡における実際の出土状況を考慮すると大変示唆的である。直接信仰に関わるメダイやコンタツについていえば、長崎市内や大分市内を除くと遺跡出土例は少ない。それらの布教拠点地以外の遺跡では、埋葬に伴う副葬品などとして意図的に埋納された状態で見つかる例が目立つ。同時代の他の器物に比べて、キリシタンの信仰関連品は、その出土総数に比して明らかに意図をもって遺構内などに納めたと考えられる事例の多いことが、布教拠点地以外の遺跡で特徴的である。

たとえば、博多遺跡群第111次調査（博多小学校敷地内）では、Ⅱ区からメダイ兼十字架の鋳型が1点と、Ⅳ区からメダイが1点出土している。Ⅱ区のH-9区から出土した下部欠損状態のメダイ兼十字架の鋳型は、長軸1.6m・深さ0.7mの楕円形の「土壙」SK20号内より、慶長（1596～1615）年間の唐津系陶器片・朝鮮王朝陶器片・備前陶器片や土師器皿・丸瓦片とともに見つかった。土坑の形状と遺物出土状況から判断して破損廃棄された状態と考えられる。しかし、Ⅳ区G-3区またはA-3区のⅠ層から単独で出土したメダイ完形品は、その下面から検出された小土坑Pit272に本来伴っていた可能性が指摘されており（佐藤編2002）、秘匿埋納品の可能性も考慮される。なお、Ⅲ区の遺構面または包含層からもやや特異なメダイが1点出土しているが、出土状況の詳細が不明である（佐藤編2007：343頁）。

黒崎城跡遺跡では、5a区第5面の長軸1.6m・深さ15cmの不整形の小土坑P417底面近くから、礫が散在する中で単独でメダイ1点のみが出土している（図4）。黒崎城跡遺跡の第5面は、黒崎城築城の1604（慶長9）年から廃城後の黒崎宿整備が整う1638（寛永15）年の間に形成された城下町から宿場町への移行期の遺構面と考えられている。なかでもP417は長崎街道に直面した町屋的な掘立柱建物跡に重複している。周囲では、金属加工関連遺物が多数出土していることと、メダイの紐通し穴部分の腐食欠損状況から、報告者は身に着けていた職人・商人が開口していた土坑中にたまたま遺失したか、非常事態に「隠匿」した可能性を想定する（佐藤編2007：331・339頁）。しかし、遺失物

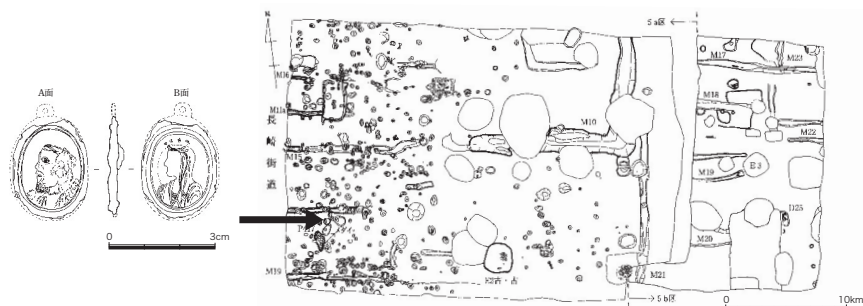


図4 北九州市黒崎城跡遺跡のメダイ出土状況 出典：(佐藤編2007) 矢印追加

が入りやすい土坑が開口していたとすると、同時代に極めて希少なメダイ以外にも多様な遺物を含むことが自然である。メダイの単独出土状況から判断して、建物床下に設けた土坑内に封じた秘匿埋納品であった可能性が高いと考えられる。

これらの事例と『邪宗門一件口書帳』の記述を踏まえると、禁教期の緊急混乱時に形成されそのまま忘却された信仰関連品の秘匿埋納遺構・遺物が、現在も今村周辺に残る可能性は少なくないとみられる。

(2) 禁教期の潜伏キリシタン墓地

禁教期の今村キリシタンは、寺請制度の下で仏教寺院の檀那寺と社会制度的に不可分のつながりを有していた。今村キリシタンを代表する青木家と平田家は、青木家が久留米市安国寺(山川神代1-5-21)、平田家が久留米市善導寺塔頭の不断院(善導寺町飯田555)の檀家でもあった(今村信徒発見125周年記念誌編集委員会編1992:75頁)(図5)。そのため、キリシタンとしての信仰内面と、仏教徒としての外面体裁を両立させる必要が常に生じた。その状況を、『今村切支丹小史』は次のように説明する。

「葬式 死亡者があると、親族は皆集って死者の為に祈る。葬る時は、紙で十字架を作り、之を胸の中に入れてやる。無論檀那寺の僧侶が来て剃髪を施す。拒絶すると大変なことになるので、信徒は已むを得ず僧侶のなすがままに放任



図5 安国寺(左)と不断院(右) ※筆者撮影

し、墓地に行ってから首にかけてある守袋を秘かに取捨てて後之を埋葬したものである」(今村カトリック教会編1952:10頁)。

禁教期の今村キリシタンの埋葬地の全体像については、まだ充分に調査把握できていない。判明している限りでは、①今村地区内、②広琳寺、③久留米市安国寺の3箇所である。①今村地区内では、平田岩次郎氏宅の庭に、今村キリシタン元祖の一人平田右京の孫である平田次兵衛とされる1665(寛文5)年没の「高安勇心信士」の墓塔があり、「寛文五年六月八日卒 施主平田惣右衛門」と刻まれている(竹村1964:181頁, 平城ほか1981:159頁, 今村信徒発見125周年記念誌編集委員会編1992:70頁)(図8c)⁹⁾。今村地区におけるその他の禁教期の墓の有無は未確認であるが、地区内の現状から推して現存例は少ないと見込まれる。②広琳寺には、今村キリシタン創始者の一人である「府中町切支丹与左衛門」の末孫青木道立の墓があったことが、『邪宗門一件口書帳』に記載されている(国武ほか1977:129頁)。今村の北隣の大刀洗町大字上高橋の広琳寺と考えられるが、青木道立を含む同時代の墓地の現存有無は未調査である。なお、平田家が属する不断院は独立した墓地がなく、善導寺の墓地はすでに大幅な改葬整理が済んでおり、禁教期の平田家関連の墓の有無を含めて特定は困難である。

現在、禁教期当時の今村キリシタン関係者の墓地が比較的良好な状態を留めているのは、③の久留米市安国寺墓地である(図6, 図8a・b・d・e)。安国



a. 1964年頃の青木家墓地 出典：(竹村1964)



b. 2014年現在の a と同一地点 筆者撮影



c. 地藏立像墓碑 出典：(竹村1964)



d. 2014年現在の c 基壇部分 筆者撮影



e. 「ジョアンの供養塔」 筆者撮影



f. 今村青木家関係墓地全景 筆者撮影

図6 安国寺今村青木家関係墓地

寺墓地については、竹村覚氏が早くから注意しており、当時すでに墓地の整理改葬が進んでいたとされるが、今村青木家関係者の墓地が現存することを指摘している（竹村1964）。そして、約50年前の竹村氏の調査時点と比べると傾いだものや倒壊分離した墓碑もあるが、安国寺墓地南西部の一面に今なお現存することを確認できた。

合計16基ほどの墓碑が中央の空間に正面を向けて「コ」の字状に配列されている一角が、青木家関係の墓域として識別できる。植生の繁茂などのため全例を詳細に調査できていないが、紀年銘が明確な例では、元禄（1688～1704）・正徳（1711～1716）・明和（1764～1772）・文化（1804～1818）年間のものが確認できる。すべて近世の墓碑であり、明治期以降のものは見られない。これらは、地下埋葬施設などを含めて、近世の墓地造営当初から大きく位置が改変されていない可能性がある。朽木量氏の近世墓碑形態分類（朽木2004）を参考にすると、頂部の正面－背面方向が半楕円形状になった方角板状のB2型櫛型（額縁有）（図8d）と、頂部の正面－背面方向が三角形状（切妻屋根状）になった方角板状のE型駒型（額縁有）が多い。組み合わせた両手上に宝珠を抱え持つ僧形の仏座像を正面頭部付近に彫り込んだ、B2型櫛型（額縁有）の変形とみられる例もある（図8e左）。またこの一面に、竹村覚氏のいう「マリア地蔵」を含む、地蔵菩薩を多段の基壇上に据えた坐像型と立像型も各1基存在する。竹村氏が「ジョアンの供養塔」として今村の信徒の尊敬対象であったとする1基（竹村1964：185頁）は、多段の基壇の最上段に蓮華座の地蔵菩薩坐像を載せる（図6e、図8a）。蓮華座直下の基壇石が六角柱状で、そこに「実岸宗節居士」・「元禄八年十二月十九日」などの刻銘がみられる。もう1基は、多段の基壇上に地蔵菩薩立像を据えた例であったが、現在は倒壊分離して、仏像部分の姿は確認できない（図6c・d、図8b）。仏像直下の基壇が特異な形態をしており、正面側半分は竹村氏が指摘するように蒲鉾形であるが（竹村1964：147頁）、背面側半分は蓮華座になっている。

なお、すぐ近くの無縁墓碑集積場所には、竹村氏のいう「マリア地蔵」が5体確認できる。すべて僧形で頭部を欠失しているが⁶⁰、4体は組み合わせた両

手で宝珠を抱えもち、いずれも地藏菩薩立像と考えられる。竹村氏の報告より数年前までは数十基が存在し、すべて今村キリシタン関係者の墓であったとされる（竹村1964：137-139頁）。

安国寺の青木家墓地の墓碑は、全体として近世の一般的な墓碑・供養碑の範疇におさまり、形態・刻銘・配列などにも特別に異質な点はみられない。安国寺墓地内に散在する他の近世墓碑と比較しても、極端な差異は見出しがたい。容易に潜伏キリシタンを連想させるような特異な外見的特徴をもたないことこそが重要と考えられる。しかし、竹村氏が指摘したような「マリア地藏」型の墓碑が本来さらに多数存在したとすると、長崎の潜伏キリシタンの白磁観音像と同様に、今村キリシタンが特にその形態を選んで信仰対象を仮託・投影していた可能性もあるが、考古学的には特定困難である。

安国寺の今村青木家関係墓地は、今後さらに慎重な調査検討が必要であるが、禁教期の明確な潜伏キリシタン墓地の現存例として、全国的にも非常に稀な例と理解される。

(3) 信仰復活後の墓碑形態変化

今村地区の集落南西外側耕作地の中の東西に細長い長方形の一角に、地区の共同墓地が存在する（図7）。ほとんどが洗礼名（霊名）を刻むキリスト教徒の墓碑であるが、数基ほど戒名を刻む仏教徒の墓碑も含まれる。すべて明治期以降の近現代の墓碑で、数十基が林立する。非常に多様な形態の墓碑が存在するが、そこには1873（明治6）年の禁教令撤廃後のカトリック教徒としてのキリスト教信仰復活過程が明瞭に残されている。なお、紀年銘は、西暦と元号を刻む例があり、元号のみの例も目立つ。西暦と元号を併用した例も少数存在する。

全例を詳細に検討していないため、ここでは墓碑の形態を仮に大まかに分類すると、4系統の立碑形墓碑に大別できる。系統1・2はほぼすべて無基壇であるのに対して、系統3・4は基壇を伴う。全体としては、系統3・4が多く、系統1・2は少数である。分布状況は、系統1・2が墓地内西北部、系統3が



a. 墓地中央部～西部 ※系統3 墓碑が主体



b. 墓地北東部 ※系統4 墓碑が主体



c. 系統1 墓碑 (額縁有)



d. 系統1 墓碑 (額縁無)



e. 系統2 墓碑

図7 今村地区共同墓地 ※筆者撮影

中央部，系統4が北東部に集中しており，造営年代の古→新傾向とおおむね対応していると考えられる。

系統1（図7c・d，図8f・g）は，方角板状で頂部の正面－背面方向が主に二段の丸みを帯びた山形状となる。正面上部に十字架を刻むものが多く，確認できた範囲ではすべて明治期の年号である。1例のみであるが，正面に額縁状の彫り込み面を設けて刻銘した1906（明治39）年の墓碑（図7c，図8f）があり，禁教期の安国寺青木家墓地の方角板状のB2型櫛型（額縁有）と系統的連絡関係にあるとみられる。禁教期の墓碑形態の延長上に，カトリック教徒としての墓碑を新たに創出した状況が想定できる。

系統2（図7e, 図8h）は、細長い方角柱（角材）状で頂部の正面－背面方向のみが三角形状（切妻屋根状）になるものと、頂部が平坦になるものがある。確認できた範囲では、すべて明治～大正期の年号である。共同墓地内最古級の1885（明治18）年の例も含まれる。禁教期の安国寺墓地には見られない部類で、信仰復活後に今村カトリック教徒が初めて採用した新たな墓碑形態と考えられる。しかし、大枠としては、仏教・神道系の墓碑形態と極端な差異はない。

系統3（図7a, 図8i）は、太めの方角柱状で、頂部形態は平坦なもの・二側縁の角が丸みを帯びたもの・正面－背面方向のみ三角形状（切妻屋根状）のもの・四角錐（寄棟屋根）状のものなどがある。共同墓地内に数基ある仏教徒の墓碑もこれに含まれるが、すべて正面に額縁状の彫り込みを備える点が、カトリック教徒の墓碑と明確に異なる。確認できた範囲では、明治期後半～昭和戦後期の例までである。遠方からは、国内の一般的な近現代の仏教系墓碑とあまり差異が見えず、洗礼名の刻銘のみからカトリック教徒の墓碑として判別可能である。同時代の仏教系墓碑から派生した墓碑形態と考えられる。

系統4（図7b, 図8j）は、太めの方角柱状の基壇上に十字架を載せるものである。確認できた範囲では、昭和戦前期～戦後期のものが中心である。系統3の墓碑形態を基に、キリスト教的特徴を明瞭にするために新たに創出した形態という印象を受ける。

また、これらの立碑形墓碑とは別に、1950（昭和25）年の伏碑形墓碑も少なくとも1例存在する。そして、1976（昭和51）年に、今村カトリック教会堂敷地内に納骨堂が設けられたため、共同墓地内での墓碑造営は以後ほぼ途絶えている。

今村地区の共同墓地における近現代墓碑形態変化の重要な特徴としては、信仰復活後にそれまでの墓碑形態が一挙に刷新されるのではなく、ある程度禁教期の墓碑形態との系統的連絡関係が存在したことがうかがわれる点である。これは、キリスト教伝来当初の日本国内における16世紀後葉～17世紀初頭の墓碑形態変化と、時を隔てて類似した現象ともいえる。たとえば、国内最古級のキリシタン墓碑が確認されている京都府・大阪府では、仏教系の光背形などの立

碑形墓碑の形態を採用し、そこに洗礼名や十字架を刻み、頭頂部の形態を変化させることで最初のキリシタン墓碑を創出している。そして、それよりも遅れて完全にキリシタン独自の墓碑である伏碑形墓碑が現れる（新村・浜田1923, 大石編2012）。今村地区の共同墓地でも、系統1～3のように仏教系墓碑の形態大枠を採用しながら、形態細部や刻銘に独自性を示すことからカトリック教徒としての墓碑がはじまる。仏教系墓碑と視覚的に明瞭に異なる印象を与える系統4や伏碑形墓碑は、それらよりも遅れて出現する状況がみられる。

ちなみに、国内の近代キリスト教徒の墓碑形態変化については、長崎県五島^{ひさか}の久賀島における元潜伏キリシタンの近代キリスト教墓碑に関する調査研究例（大石編2007）が代表的である⁷⁾。久賀島では、禁教期の墓碑形態の詳細は不明であるが、明治期初頭から直ちに明確なキリスト教徒の墓碑として伏碑形墓碑が採用され、1930年代以降は仏教・神道系墓碑と共通する墓碑の上に十字架を載せる立碑形墓碑が主体となる状況が確認されている（大石編2007）。つまり、1930年代以降の墓碑形態はほぼ今村と共通するが、明治期初頭の墓碑は今村と大きく異なる。近代初頭における両者の墓碑形態採用の差異は、禁教期を通してキリシタンの埋葬型式としての伸展葬を維持してきた久賀島に対して、檀那寺の規制をより直接強く受けた今村は禁教期の早くに座葬を受容したことに由来する可能性がある。

IV. 考察

筑後今村キリシタンの物質文化に関して、久留米藩公事方の尋問記録である『邪宗門一件口書帳』の記述と近世から近代の墓碑形態に特に着目して、考古学からの検証課題を試行的に整理した。

禁教期のほぼ唯一の同時代史料である『邪宗門一件口書帳』の記述内容を考古学的に再検討した結果、今村キリシタンは、幕末の浦上信徒との接触・往来以前、禁教期以前の信仰関連品の所有数が非常に少ないことを確認できた。そうした伝来の信仰関連品に乏しい理由として、①禁教期初期に完全秘匿実施、

②信仰関連品の入手困難な禁教期に信仰本格化，③公事方の搜索押収を免れた，という3つの可能性を推測した。これに関連して、『邪宗門一件口書帳』の記述から推測すると，禁教期の緊急混乱時に形成されそのまま忘却された信仰関連品の土中への秘匿埋納遺構・遺物が，現在も今村周辺に残る可能性があることを指摘した。そして，今村キリシタンがこのような検挙危機に際して信仰関連品の秘匿埋納を行った状況は，北九州市黒崎城跡遺跡などの近世初頭の遺跡における実際のキリシタン信仰関連遺物出土状況にも良く合致する可能性がある。

また，今村キリシタンの近世～近代の墓碑に関しても検討をおこなった。禁教期の現存墓地の代表例である久留米市安国寺の今村青木家関係の墓碑は，全体として近世の一般的な墓碑・供養碑の部類におさまり，形態・刻銘・配列などにも特別に異質な点は見られない。そのため，容易にキリシタンを連想させるような特異な外見的特徴をもたないことこそが，潜伏キリシタンの墓碑として重要であることを確認した。近代の今村地区の共同墓地でも，仏教系墓碑の形態大枠を採用しながら，形態細部や刻銘に独自性を与えることでカトリック教徒としての墓碑がはじまる。仏教系墓碑と視覚的に明瞭に異なる印象を与える墓碑は，それよりも遅れて出現する状況がみられた（図8）。これは，長崎県久賀島の近代初頭におけるキリスト教墓碑と比較すると，禁教期を通してキリシタンの埋葬型式としての伸展葬を維持してきた久賀島と異なり，檀那寺の規制をより直接強く受けた今村は禁教期の早くに座葬を受容したことが，近代初頭の墓碑選択の差異にまで反映した可能性があることを指摘した。

これらの点を踏まえると，今村キリシタンの禁教期を通しての信仰に関わる物質文化の特質は，実際の信仰内面に直接関わる品目は非常に限られていたうえで，制度的・表面的な仏教徒としての外面体裁から逸脱することを慎重に避けることにもあったとみられる。同時に，今村における公事方の押収品目に，長崎のキリシタンが信仰対象を仮託・投影していた白磁マリア観音像のような代替的な偶像類が存在しないことを勘案すると，安国寺青木家墓地の地藏菩薩像類などがそうした役割の一部を担っていた可能性も改めて考慮される。つま

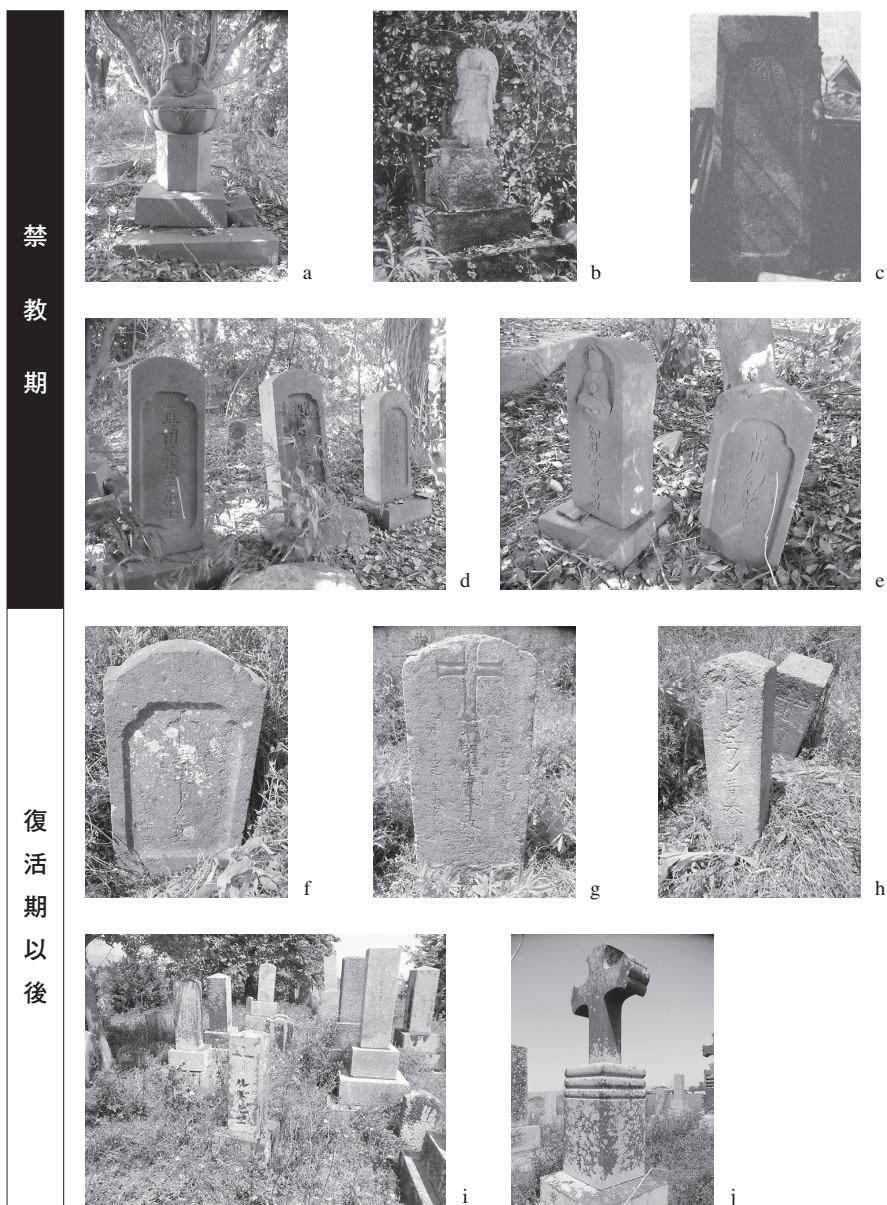


図8 今村キリシタンの禁教期～復活期以後の墓碑形態変化
※b (竹村1964)・c (平城ほか1981) を除き筆者撮影

り、単独では仏教上の信仰に関わる品目であっても、長崎の潜伏キリシタン以上に組み合わせを変えて再解釈を重ねることで、今村キリシタンとしての信仰内面に矛盾しない信仰関連品目に転化させていた可能性が推察されるのである。

キリシタン史研究のうえで、困難な課題が多いのが潜伏キリシタンの研究である。なかでも非常に大きな混乱要因になっているのが、潜伏キリシタンの信仰にまつわる物質文化資料の識別認定である。その苛酷で奇跡的な歴史的経緯が幅広い関心を集めることに比例して、歴史的根拠があいまいで時に贋物を含む膨大な資料がこれまで潜伏キリシタンと結び付けられてきた。とりわけ、各種の十字状の文様意匠や、「切支丹灯笼」（織部灯笼）、墓碑、紙踏絵、あるいは各種の「南蛮物」などがその代表例として知られる（松田1969・1975、チースリク1995、高倉2014、今野2013）。これらの資料にまつわる拡大解釈と俗説が潜伏キリシタン像に与えた影響は大きく、たとえば松田毅一氏が詳細な検証を基にキリシタンの信仰との関連性を明確に否定している「キリシタン灯笼（織部灯笼）」（松田1969）は、現在もなお全国の多くの市町村で潜伏キリシタンの信仰関連の文化財として位置づけられ続けている。そして、これらの歴史的根拠が不明確な資料の一群に覆い隠されることで、本来の潜伏キリシタンの信仰にまつわる物質文化の実態が一層見えづらくなっている。キリシタン遺物に関する史資料批判学の整備確立が必要と考えられる。

このような状況に関して、今野春樹氏の提唱したキリシタン遺物の認定基準である「キリスト教学的観点、歴史学的観点、美術史的観点、考古学的観点」（今野2013：9頁）からの多角的検証は大変重要である。そして、同様の問題意識に基づいて、大石一久氏・田中裕介氏らが中心となり国内のキリシタン墓碑の再定義を行い、網羅的集成と変遷過程の解明に最近成功している（大石編2012）。より困難な課題をもつ潜伏期のキリシタンの物質文化に関しても、とりわけ対象資料の歴史的系統性と同時代的組成の観点から整理検証することが今後の作業課題と考えられる。

このような観点からは、地域範囲が明確で、禁教期最末期の状況に関する記録が残る今村キリシタンの物質文化に関する研究は、キリシタン考古学にとって大きな可能性を秘めるといえる。

註

- 1) 「ゼーアン」について、『大刀洗町史』と今村教会では「ジョアン又右衛門」（平城ほか 1981, 今村信徒発見 125 周年記念誌編集委員会編 1992）と呼称しているが、『邪宗門一件口書帳』では確認できない人物名である。
- 2) 今村カトリック教会は、「一万田右馬助」としている（今村信徒発見 125 周年記念誌編集委員会編 1992）。
- 3) 『今村切支丹小史』（今村カトリック教会編 1952）では「祖先重代の宝物だった祭服」も押収されたとするが、『邪宗門一件口書帳』では確認できない。
- 4) 『邪宗門一件口書帳』の翻刻者の一人の平田松雄氏は、現在は閉館している「今村切支丹資料館」を開設していた。平田松雄氏の伝記小説によると、口書帳に名が登場する平田松雄氏の曾祖父の「武助」が、1873（明治 6）年まで像本体と頭部の揭示部分を分解して箱枕内に秘匿していたキリスト十字架磔刑像と、「観音開きの十字架」を所蔵していたとされる。また、別の箱枕内に秘匿してあった、小形の掌大のマリア像 1 点・メダイ 1 点・コンタツ 1 連も所蔵していたとされる（佐藤 2002：216 頁）。また、詳細は不明であるが、青木信氏が所蔵する土蔵の中に下げて祈ったという「地獄絵」と「臨終の絵」の各 1 点も存在する（今村信徒発見 125 周年記念誌編集委員会編 1992：11 頁）。いずれも禁教期前後の可能性も含めて、製作時期は不明である。
- 5) 竹村覚氏は、「高安勇心信士」の墓を、平田右京ではなく、平田左京の墓としている（竹村 1964：181 頁）。
- 6) 安国寺青木家関係墓碑の地蔵菩薩立像頭部の欠失要因は、偶発的な倒壊破損のほかに、明治初頭の廃仏毀釈、さらには長崎・浦上の教会・信徒からの廃仏指示が関連した可能性もある。『邪宗門一件口書帳』によると、「弥吉」は長崎の天主堂の「パーテル」から「先祖よりの位牌家等に有之候ては此宗旨の障碍に相成候間、他宗より相授り居候品は早々焼捨候様」（国武ほか 1977：124 頁）と指示を受け、実施した。「善市」も浦上の信徒から「家主たる者は先づ先祖の位牌并弥陀仏を海に流候か焼捨候様」（国武ほか 1977：130 頁）と勧められたが、拒絶している。このような状況を考慮すると、明治期初頭の信仰回復期に今村カトリック教徒自身の手で行われた廃仏行為の痕跡の可能性もあり、慎重な検討が必要である。
- 7) ちなみに、今村周辺での一般的な近世～近代にかけての墓碑については、筑前秋月（福岡県朝倉市）城下の仏教寺院墓地における仏教系墓碑の形態変化とその意義に関する研究例（時津 2000）がある。また、今村キリシタンと交流した浦上信徒の「浦上三番崩れ」後の流刑先における強制改宗後の神道型式などの墓碑については、安高啓明氏の研究（安高 2014）がある。

引用・参考文献

- 甘木歴史資料館編 1988「十字架が彫られた軒丸瓦」、『温故：甘木歴史資料館だより』第8号：3頁，甘木歴史資料館（福岡）
- 井澤洋一 2010「福岡藩領内におけるキリシタンの動向と考古資料」、『海路』第9号：31－51頁，海鳥社（福岡）
- 井藤暁子編 1999『彩都（国際文化公園都市）周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』，財団法人大阪府文化財調査研究センター（大阪）
- 今野春樹 2013『キリシタン考古学』（考古学調査ハンドブック8），ニューサイエンス社（東京）
- 今村カトリック教会編 1952『今村切支丹小史』，今村カトリック教会（福岡）
- 今村カトリック教会編 1964『今村教会百年のあゆみ』，今村カトリック教会（福岡）
- 今村信徒発見125周年記念誌編集委員会編 1992『信仰の道程：今村信徒発見125周年記念誌』，今村カトリック教会・本郷カトリック教会（福岡）
- 海老沢有道 1978「筑後国御原郡今村の復活切支丹」、『キリシタン研究』第18輯，吉川弘文館（東京）
- 大石一久編 2007『復活の島：五島・久賀島キリスト教墓碑調査報告書』，長崎文献社（長崎）
- 大石一久編 2012『日本キリシタン墓碑総覧』，南島原市教育委員会，長崎文献社（長崎）
- 大石昇編 1996『久留米城下町両替町遺跡』，久留米市文化財調査報告書第116集，久留米市教育委員会（福岡）
- 朽木 量 2004『墓標の民族学・考古学』，慶應義塾大学出版会（東京）
- 国武詰生 1973「〈邪宗門一件口書帳〉雑考」、『久留米郷土研究会誌』第2号：25－32頁，久留米郷土研究会（福岡）
- 国武詰生 1978「資料紹介：明治二巳年七・八月〈邪宗門帰依之者共血判受書〉・明治三午正月〈邪宗門相営候忌掛之者共居所名前調子〉」、『久留米郷土研究会誌』第7号：65－74頁，久留米郷土研究会（福岡）
- 国武詰生・平田松雄・竹崎貞夫 1977「邪宗門一件口書帳（御原郡今村）」、『久留米郷土研究会誌』第6号：122－144頁，久留米郷土研究会（福岡）
- 後藤晃一 2011「キリシタン遺物の考古学的研究：布教期におけるキリシタン遺物（メダイ）の流入プロセス」、『日本考古学』第32号：85－115頁，日本考古学協会（東京）
- 小林牧編 2001『東京国立博物館図版目録：キリシタン関係遺品篇』，東京国立博物館（東京）
- 佐藤一郎編 2002『博多85：博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』，福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集，福岡市教育委員会（福岡）
- 佐藤浩司編 2007『黒崎城跡3』，北九州市埋蔵文化財調査報告書第375集，財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室（福岡）

- 佐藤早苗 2002『奇跡の村：隠れキリシタンの里・今村』，河出書房新社（東京）
- 塩野和夫編 2008「九州におけるキリスト教受容の研究」，『国際文化論集』第22巻第2号：33-80頁，西南学院大学学術研究所（福岡）
- 新村 出 1923「撰津高槻在東氏所蔵の吉利支丹遺物」，『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第7冊（吉利支丹遺物の研究）：1-52頁・図版第1-第15，京都帝国大学文学部，刀江書院（東京）
- 新村出・浜田耕作 1923「京都及其の附近発見の切支丹墓碑」，『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第7冊（吉利支丹遺物の研究）：53-76頁・図版第16-第25，京都帝国大学文学部，刀江書院（東京）
- 高倉洋彰 2014「踏絵の一形態：紙踏絵の紹介と検討」，『行動する考古学』：279-312頁，中国書店（福岡）
- 竹村 覚 1964『キリシタン遺物の研究』，開文社（東京）
- 大刀洗町教育委員会編 2012『福岡県指定文化財今村教会堂建築的調査建築史的調査報告書』，大刀洗町教育委員会（福岡）
- チースリク，フーベルト 1995『キリシタン史考：キリシタン史の問題に答える』，聖母の騎士社（長崎）
- 時津裕子 2000「近世墓における階層性：筑前秋月城下の事例から」，『日本考古学』第9号：97-122頁，日本考古学協会（東京）
- 西谷 正 2010「キリシタン考古学の成果」，『温故』第49号：3-7頁，甘木歴史資料館（福岡）
- 平城直之・森田隆一・久保到 1981『大刀洗町史』，大刀洗町郷土誌編纂委員会，大刀洗町（福岡）
- 安高啓明 2014「浦上村キリシタン改心者墓石の意義：萩・津和野を事例に」，『東アジア古文化論攷』2：550-564頁，中国書店（福岡）
- 安高啓明編 2012『キリシタン考古学の世界：今日に蘇る祈りとさげび』，西南学院大学博物館（福岡）
- 安高啓明・方圓 2014「久留米藩今村の潜伏キリシタンの発覚と信仰生活」，『西南学院大学博物館研究紀要』第2号：15-24頁，西南学院大学博物館（福岡）
- ラスレス，ヨハネス（柳谷武夫訳） 1961「筑前・筑後のキリシタン」，『キリシタン研究』第6輯：3-82頁，吉川弘文館（東京）
- 松田毅一 1969『キリシタン：史実と美術』，淡交社（東京）
- 松田毅一 1975「第三章 キリシタン宗門と十字の記号」，『キリシタン研究』第二部論攷篇：47-123頁，風間書房（東京）
- 三原 誠 1991『汝等さりしたんニ非ズ：筑後今村キリシタン覚書』，今村切支丹史料館（福岡）